



Title	Factors associated with "Ikigai" among members of a public temporary employment agency for seniors (Silver Human Resources Center) in Japan : gender differences
Author(s)	白井, こころ
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46333
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について ご参照 ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	白井 ころろ
博士の専攻分野の名称	博士(医学)
学位記番号	第 20154 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科社会医学専攻
学位論文名	Factors associated with “Ikigai” among members of a public temporary employment agency for seniors (Silver Human Resources Center) in Japan ; gender differences (定年退職年齢後就業者における生きがい感の関連要因：シルバー人材センター会員における性差の検討)
論文審査委員	(主査) 教授 磯 博康 (副査) 教授 森本 兼彙 教授 的場 梁次

論文内容の要旨

〔 目的 〕

本研究では Subjective Well-being を示す指標のひとつとして「生きがい感」の概念を取り上げ、生きがい感の保持に関連する要因について検討した。健康に関連する心理・社会的要因としては、ストレスの影響などが広く知られるが、近年 happiness や morale などの肯定的な感情が健康状態や、健康に関連する行動変容に影響することの重要性が認識されている。とくに高齢者研究の分野では「生きがい感」を含めた心理的充足感が、健康状態および寿命に関連することが報告されている。そして、高齢者の生きがい感に影響を与える要因としては、社会参加活動、世代間交流、サポートネットワークなどが指摘されているが、その結果は一致していない。また、個体差の拡大する高齢者集団において、性差による生きがい感の関連要因の違いは知られているが、大規模データによる検討の不足が指摘されている。

今後、団塊の世代の高齢化が進む中、定年退職年齢後の「生きがい感」を含めた主観的幸福感に対する働きかけは、広い意味での健康増進活動として、重要性を増すと考えられる。そのため本研究は、高齢者の生きがい感に関連する要因を検討し、生きがいの保持に資する社会資源を探ることを目的とした。

〔 方法ならびに成績 〕

調査対象者は、大阪府内のシルバー人材センター全会員 41,593 人とし、登録者数を基に府内全 38 センターから無作為抽出した計 4,737 人に留置法による質問紙調査を実施した。そのうち分析不可能なものを除いた 4,376 人（有効回答率 92.4%）を分析対象者とした。

本文中で使用した生きがい感については、本人が主観的に判断した 6 段階の評定を用い、「定年後の就業活動を通じた社会生活変化得点」については、「一日の会話」「友人数」「社会的関心」（増加＝1 点、不変＝0 点、減少＝－1 点）を合計した点数（－3～3 点）を使用した。（ $\alpha=0.776$ ）

統計解析には SPSS11.05J を使用し、生きがいに関連する要因の検討には、重回帰分析とロジスティック回帰分析、

性差の検定には Kruskal Wallis 検定と分散分析を用いた。

重回帰分析により生きがい感（0-5点）に関連する要因を検討した結果、年齢、性別、配偶者の有無、年収、部屋数、健康的な生活習慣（Breslow7項目）、就業目的、就業を通じた社会生活変化得点、今までの人生に満足していること、悠々自適生活への希望があること、が関連する要因と考えられた。男女別に検討した結果、部屋数、健康的な生活習慣、社会生活変化得点、今までの人生に満足していること、が男女に共通して関連する項目と考えられた（Adjusted $R^2=0.20$ $p<0.001$ ）。一方で、年収、就業目的は、男性のみで生きがい感と有意な関連がみられた。

加えて、重回帰分析の結果を元に、ロジスティック回帰分析による生きがい感の有・無（1点以上と0点）と各要因との関連を検討した結果、就業活動を通じた社会生活の変化得点との間に優位な関連が見られた。社会生活変化得点が1点上がることによる生きがい感「有」のORは、 $-1 \geq$ の者に対して、0点=1.9(1.1-3.3)、1点=3.5(1.9-6.6)、2点=3.1(1.7-5.7)、3点=7.8(4.0-15.2)であった。加えて、男女別に分析を行った結果、男性では年収、部屋数、主観的健康感、健康的な生活習慣、就業日数、社会生活変化得点のそれぞれが大きいほど、今までの人生に満足しているほど、生きがい感ありのオッズ比が高かった。一方、女性では、社会生活の変化得点が高いほど、今までの人生に満足しているほど、生きがい感ありのオッズ比が高かった。

〔 総括 〕

男女共通して、定年退職年齢後の就業活動を通じた生活の充実（会話・友人・社会的な関心）が生きがい感と関連した。

その他の生きがい感の関連要因に関しては性差があり、男性では、健康状態、経済状態、就業日数の多寡などの生活環境に係る項目、女性では、就業を通じた社会生活変化や今までの人生に満足していることなど、主観的な充足を示す項目が関連要因として認められた。

論文審査の結果の要旨

本研究は Subjective Well-being を示す指標のひとつとして「生きがい感」の概念を取り上げ、社会参加活動に参加する高齢者における「生きがい感」の保持に関連する要因について検討したものである。

高齢者の生きがい感に影響を与える社会的要因については、先行研究がいくつか報告されているが、標本数が小規模なものなど、代表性のあるデータによる検討は不足しており、また関連要因についても、その結果は一致していない。

こうした状況のなかで、本研究では、府内のシルバー人材センター全会員 41,593 人を対象とし全センターから 10% づつを無作為抽出した計 4,737 人に留置法による質問紙調査を実施し、4,376 人（有効回答率 92.4%）を分析対象者として、生きがいの関連因子について検討を行っている。

重回帰分析およびロジスティック回帰分析の結果から、男女共通して、定年退職年齢後の就業活動を通じた生活の充実（会話・友人・社会的な関心）が生きがい感と関連することが示された。また、生きがい感の関連要因に関しては性差があり、男性では、健康状態、経済状態、就業日数の多寡といった生活環境と関連する項目と、今までの人生への満足感の主観的な充足を示す項目が、関連因子として認められた。しかし、女性では、就業を通じた社会生活変化のほかには、今までの人生への満足感の、主観的な充足を示す項目のみが関連要因として認められた。

今後、団塊の世代の高齢化が進む中、定年退職年齢後の「生きがい感」を含めた主観的幸福感に対する働きかけは、広い意味での健康増進活動として、重要性を増すと考えられる。本論文は、高齢者の生きがい感に関連する要因を検討し、生きがいの保持に資する社会資源についての知見を明らかにした点で、学位に値するものと認める。